第4回土佐町教育支援センター検討委員会

令和2年6月10日（水）18:30～20:15　会議録

井手委員長

それでは会議を始める。委員の皆さんにはご案内のとおり、副委員長、事務局とも相談して、今回は非公開とさせていただいた。前回、第3回の5月20日、日高村さんの取組を聞いていただいた後、閉会の折に、次回は皆さんの感想や方向性、思いを共有いただきたいということで今回の会となっている。ぜひ奇譚のない意見を出していただき、実りのある会にしたいと思っているのでよろしくお願いする。

早速議事に入る。まずは次第の1番、各委員の意見の共有。基本的には全員の方にご発言をいただきたいので、順番にお願いする。5月20日の日高村さんの話を聞かれての感想でも、教育支援センターの方向性でも構わない。時間は60分を予定している。

山下委員

5月20日の日高村の話を聞いて。自分が思ったのは、まず、心意気で活動ができている。人が好きなんだと感じた。人が好きだから心意気ができ、どんなことでもやっていこうという行動に繋がっていると思った。人が好きで、町が好きであるから、場所も貸してもらえる。土佐町でも、人が好き、この町が好きということを存分にアピールできるようにしていき、施設の有効活用などできたらと思う。

そういうことを踏まえて、これから土佐町で立ち上げていくうえで、人が好きじゃないとやっていけないと思う。しんどいこともあると思うが、人が好きだからがんばれるということもある。そういったことに重きを置きながらこれから活動していけたらと思った。

森委員

日高村さんと同様に就学前から就労までの支援ができる体制づくりが土佐町でも必要と感じた。ただ、土佐町で実施する場合に、関係する課や教育との連携が日高村さんに比べるとかなり弱いのかなと感じた。土佐町として支援するには各課の連携がかなり必要になるだろうし、それができれば同様の取組ができるのではないかと思った。

いじめ、引き籠りだけでなく、発達障害のサポートなどももうちょっと充実できるような体制を作っていく必要性を感じた。

川田委員

日高村の方の話を聞き、人として基本的なことなのではないかなと。子供たちのことを思って皆が考えていく。その子の困っていることを見つけ出して、専門的な知識を持った方がそこに関わっていく。それは教育委

員会としては当たり前のことではないかと感じた。皆が困っている子どもたちのことを考えて活動していけば、ブレはないだろうと。そこが土佐町はちょっとブレたところがあったと個人的には思った。

中学校のPTA会長になり、私ができることは何か考えた時に、保護者からの意見、学校との関わり方、その繋ぎになればいいなと思い、この教育支援センターのことについても、何か私にもできることがあれば、日高村の心意気ではないが、できることがあれば私もやりたいという気持ちになった。

個人的な話になるが、休みの日に主人と日高村へ行ってきた。素朴な村。お婆さんたちが道沿いでお話をしていたり、子どものために鯉のぼりをたくさん上げていたり、いいところだなと思った。自分も心意気でやっていけたらいいなと思っている。

近藤委員

前回の報告を聞いていて、臨機応変という言葉がよく出たと思う。小さな村であるから、そういう風に臨機応変ということができ、土佐町でも同じように考えられるのではないか。

教育支援センターを作るなら、地域に精通したコーディネーターが必要ではないか。そして通ってくる子どもたち個々に応じた人材を活用するとか、活動内容も地域の方々を巻き込んだ独自の、子どもたちもやってみたいという活動が、小さな町だからこそ地域の人と一緒にできるのではないか。教育支援センターは、やはり学校に行けない子どもたちにとっては第二の学校というか、居心地のいい場所を町ぐるみで作っていってあげられるといい。

和田千恵子委員

5月20日の会は聞きたかったが、職員会と重なり出席できず、議事録を見た。

皆さんが言っていたように、言葉の中にすごく温かさがある。そこが支援の始まり。お母さんからぽっかり相談がある。ほっとする空間がある。それから、臨機応変に皆でやっていこうという気持ちの重なりで全てが動いていると感じた。

どういうことがやれるかを皆で考えていけばいい方向にいくのではないかと思った。

山首委員

やっぱりそうなのだと思った。皆さんに資料をお配りしている。去年の7月27日に『子どもたちは地域の「宝」それぞれの育ちを共に喜び合える町に』というテーマで、学校関係者、福祉、医療の方に呼びかけて、35名が参加してくれ、今、日高村がやっているようなことについて話し合いたいと思い、ときわ苑に協力いただき、ときわ苑主催でやっていただいた事業。教育委員会にも相談しながらやってきたが、この話がもっとちゃんとできていたらよかったと思った。

2ページ目、医療の現場から古賀真紀子さん、音楽療法士の鈴木琴栄さん、保健師の伊藤充恵さん。それから県外で色んな子どもたちの支援をNPOと一緒にしている私の仲間が応援に来てくれ、市川市社協

と徳島県三好市社協。三好市社協は、新しくできた国立競技場の壁に張っている木でできた紙、それをこの三好市の障害のある方が作ったものを国立競技場に貼ったという取組もした。そんな色んな方が色んなところで関われる場所を作っているプロフェッショナルな方で、そんな2人にも話をしてもらい、また、田岡香織さんはしゃくなげ荘の相談支援員。そんな方々が色んな思いを話してくれ、和田委員も参加してくれ、まずは、それぞれの方がこんな風に思っているんだとか、それぞれの方がこんな役割でこんな動きをしているんだということを全く知らない。皆が知らない。私も、保健師さんがこんな風にやってくれていることを知らなかったし、保育士の皆さんがこんな思いでやっているということもわからなかったが、この会でそういうことがよくわかってきた。

3ページの1番下に古賀先生が「さまざまな立場の方が集まる、こういう場所があるということを発信し続けることが大事」と言ってくれた。

4ページには、琴栄さんが「専門性をつなぐ網の目をつくっていく人の存在が大切」と話してくれた。

保健師さんも「保護者の思いを大事にしていきたい」という話や、5ページ目の下、岩城さんが「私が言いたいことは、地域におけるさまざまな役割を知り、様々な役割を本職の場でも使い、何かあったら繋がろうと思う」ことが必要と話してくれた。

6ページ目の田岡さんも「例えば各事業所で活発なところと連携し、そういうところにも通える場所があれば良いのではないか。新しいものを作ればそれだけコストもかかる。再度地域で何が出来るかという事を見つめることが行政と我々の仕事である」ということを話してくれた。今振り返ると、この会で言ってくださったことが本当に大事なことだったとあらためて思った。

先日、和田純一民生委員会長（和田委員）と、若者サポートセンターと高校との連絡会に行ってきた。その帰りに色んなことを話し、このカラーの資料を作った。日高村の話を聞いて、私の頭の中に土佐町のイメージはこんなイメージではないかと思いながら作った。子どもが遊んで、出会って、繋がって、学べて、そして子どもが決めることができる。子どもが選ぶことができる場所。それを学校の先生、保育士、SSW、保健師、教育委員会、保護者が三角で繋がりながら、医療やその他の専門職と如何に繋がりながら、地域の社会資源と繋がって、子どもたちが安心して過ごせる場所ができるような。そんなイメージ。あくまでも私の頭の中のイメージ。

日高村には日高村の色んないい資源があり、土佐町にも学校応援団をはじめ色んな人がいて、そんな人をうまく繋いでいくことが大事ではないか。

谷内委員

資料を1枚お配りしている。色々な他県などの教育支援センターで調べ、こんなことができたらいいなという具体的な例をそこに参考で書いている。

教育支援センターというのは、日高村の話にもあったが、0歳から22～25歳の、発達面や行動面、学校生活面、家庭生活面において支援を必要とする子どもや、子どもの育ちについて不安がある保護者に総

合的な相談を受けて対応したり、具体的な支援をする機関。不登校であったり、発達障害であったり、学校でのトラブル、非行、ネットトラブル、たくさん渦巻いている。そういうことを相談できる機能があればいいのではないか。

それから福祉と教育の連携で、山首さんのイメージとほとんど同じだと思うが、切れ目のない支援を行う。目指すのは不登校の子どももきちんと生活ができるようになるための支援。それから引き籠りの生活者をなくして、生活保護対象者から納税者へ転換を図る。そのためには多様な専門職による支援が必要。サポートチームとして保健師、SSW、SC、医療関係者、心理士などが必要に応じて集まり、連携して対応できるように。

児相、心の教育支援センターなどの専門機関や、巡回相談、適応指導教室などと積極的に関わって迅速に対応できる機関であってほしい。

子育てができない保護者が増えてきている。どうやって愛情をかけたらいいかわからない。虐待、ネグレクトもある。そういった保護者に対応する機関も必要だろう。

あとは電話相談含めて教育相談が気軽にできること。事務局があり、臨機応変に対応するスタッフを、常駐でなくても構わないと思うが、相談窓口となりコーディネートができるような方がいるといい。

民生児童委員さんが地域の方をよく知っている。そこと関わりを持って幼少期から関わり、学校、社協と連携しながら関わっていくことが大事。

最後は就労支援が必要になる。働く場所の提供。一箇所に受け入れてもらっても一週間足らずで辞めていくこともある。そうなると次のところを紹介する必要がある。多い子は7～8件相談していくそうだ。そのうちに「これならできるかもしれない」というのが見つかり、そこにお願いして、いま1ヶ月ほど続いているという話を日高村の教育長からも聞いた。そんな風に次から次へ、見捨てることなく、働く場の提供もできるような機能があるといい。

あとはチャレンジスクールと書いているが、できればこういう風に子どもたちの可能性を発見して伸ばす。社会性、コミュニケーション能力が向上するような体験活動、ボランティア活動、スポーツ、文化活動、こういうものに巻き込んでいき、人間関係をうまく作れる活動も必要ではないか。

場所は旧森小学校がいいのでは。教育委員会、役場も近い。そこを事務局として、常駐する必要はないだろうが、電話連絡があればスタッフに連絡して臨機応変に対応できるようなところがあればいい。

例えば、石原であれば旧石原小など、子どもの行きやすいところで関わりが持てるようなシステムを作っておけばいいのではないか。

最後に、土佐町の教育支援センターは、場所というよりは関係機関が連携して臨機応変に対応できる組織になることが望ましい。

稲村委員

感想だが。納税者を作るというところに心を打たれた。納税者をつくるということは仕事を探して仕事ができるようにするということ。

それと、思ったよりお金がかかっていない。あるものを使っている。県のアクションプランを使ったり。その中でちゃんと教師も呼んできている。もしかしたら私たちでもできるのではとすごく感じた。

いま、社協も教育委員会も健康福祉課もそうだが、それぞれがやっていることを一つにすれば日高村に匹敵する組織ができるのではないか。守秘義務が邪魔したりするかもしれないが、それぞれの機関で子どものことをすごく心配している。情報交換はしているが、一同に集まり、リーダー格がいて、そこでこうしようということは土佐町ではまだそこまではできていないが、何となく形的には土佐町もできているところもあるのではと感じた。

和田純一委員

山首委員がイメージを作ってきてくれたが、私のイメージもこんな感じ。これに行政、健康福祉課なども交えた四角のイメージを持っている。

一番心配なのは個人情報の関係。ただ、携わる者は誓約書を書いているだろう。無いなら「守ります」というものをもらったうえで集まって協議する。当然、対象のご本人または保護者からも同意はもらわないといけない。そういう道順を作らないと、守秘義務があるからできない、行政の垣根があり管轄外でできない、という言い訳が先に出るかもしれない。その辺りを払拭しないと土佐町はいつまでも遅れたままになると思う。それをしっかり考えてもらいながら、私は教育委員会に頑張ってほしい。

鈴木委員

遅れてしまい申し訳ない。

日高村の取組の感想。村ぐるみで寄ってたかって子育て支援をしているところが印象に残った。それから、生まれた時から就労までと長いスパンで見ており、非常に手厚い取組だと思った。

土佐町でも出生は毎年20人くらいなので、1人1人を把握することは十分可能だと思う。どの子も、トップである副村長もちゃんと知っているということはすごいと思ったし、人口5,000人の日高村でできるなら、土佐町でできないわけがないと思った。

前回も申し上げたが、学校との連携が密に取れているのであれば学校の中である必要はない。本来は学校の中にあった方が良いと考えていたが、日高村の取組を聞いて考えを変えさせられたところである。

あとは心意気というところがすごく印象に残った。先日、教育長と話す機会があり、この前日高村が来た時には歓迎の挨拶などして欲しかったということは申し上げた。ただ、町長や教育長としては、これが教育委員会の諮問機関なので、あまり出るのはよくないという思いがあるようだ。ただ、我々としてもちゃんとここに寄

り添っていると、思いはここにあると感じられればいいし、この取組が形になって立ち上がった時に、町長、副町長、教育長にしっかりと旗を振ってもらって、心意気の感じられる取組にしてもらいたいと強く思った。

新谷委員

日高村さんは人口規模もことそんなに変わらない町でありながら、密に連絡を取り合い、すぐに会議をしているということだった。やはり、近さが大事だと思ったと同時に、話が若干昔に戻るが、町長のリーダーシップが欲しい。決めたらやる。誰が何と言おうがやるという強力なリーダーシップが欲しい。それがあればこの会も無かったのではないかという気持ちもずっと引っかかっている。

それと、社協さんや他にも色んな団体さんがあり、良いところもすごくあり、個々のポテンシャルはすごいと思うが、繋がりが弱い。

うちに完全に不登校になっている子がいるが、人と関わりたくないわけでもなく、引き籠もっているわけでもなく。なぜそうなったかというと、やはり過去に戻れないのだろう。自分が思っている学校教育よりも良いものを見てしまったから戻れないのだと思う。

町から町長名義で経産省に書類が出たそうだ。土佐町でi.Dareをやるなと。そういうものが出たとしても、うちの子どもは待ち望んでいる。そういう教育を。私が強制しているわけでもなく、これは僕がいくら言っても動かない。学校へ行く気がない。そういう状態になっているが、日々楽しそうにしていることもある。

山首さんの描いている絵。これに日高村さんのように畑へ行くとか、調理ができる場とかあったらいいなと思う。学校ではやらないようなことでも、何でも、とにかく何が適正かもわからない。何がきっかけでどう変わるかわからないので、何でもやらせてみる。やってみればいいという、誰も何も止めないという気持ちが大事ではないか。臨機応変という言葉になるかもしれないが。

せっかくこの町に、鈴木委員もそうだが、せっかく良い方が来てくれている。それを活用しないと、言い方が悪いが、うまく使わないともったいない。この中にはもちろん鈴木委員の名前も入らないといけないかもしれない。ぜひ、任せてしまうというより、中に填めていただきたいという気持ち。それでいい化学反応が起こればどこよりもいい町になりそう。日高村さんより後出しでもっと良いものを出したと。そんな町になるといい。

移住者の方も多いので、昔からというのはなかなか難しいかもしれないが、もともと不登校の方がこの町に来たというパターンもある。この人なら心を開くという人もいるだろう。ここに描いている以上に巻き込んでやればいいのではないか。ただ、そこに皆さんの心意気があるかどうかだけ。気持ち一つと思った。

井手委員長

第3回終了の時にも若干話をさせていただいたが、教育支援センターの運営というのは、昨年度は民間の団体に委託していたが、基本的には日高村さんのように教育行政、福祉行政の一環として町が主体となって運営されるべき。行政機関として責任を持って運営するというのが本来の姿と感じた。

ただ、学校に行けない子どもさんもいれば、引き籠りの若者、発達障害の支援、教育力がない家庭への支援など多岐に亘るので、そういう方々を支援できる資源を掘り起こしてコーディネートしていく。垣根を取り払ってコーディネートしていける人を配置して運営していく。日高村さんの場合は誰が鍵というわけでもなかったと感じた。得意不得意はそれぞれあるので、そういった形でやっていけると一番強いのではないか。

そういう面でネックになるのは、教育委員会、福祉、学校など、個人情報の扱い。そこは和田委員さんが仰ったような形で守秘を誓約していただく形で、今までになかった形で運営していかないと、作ったが結局連携不足で機能不全になる。そこは今までの枠を超えた活動ができるようなことを考えていく必要がある。「任せた」ではなく、それぞれがそれぞれの責任を持ってしっかり情報交換しながら、トップからもっと全うしていただくような体制を作っていく必要があると感じた。

この後はグループディスカッションとなっているので、自由に意見を出していただき、方向性を共有し、深めていきたい。

他に何か言い抜かったことがあれば先に伺うが。

新谷委員

ここでいくら話をしても、最終的にNOと言われると困る。そこで鈴木委員にお話を聞きたい。ここで検討委員会を3回やってきたが、議員さんの中ではどんな話になっているのか。何か前向きな意見があるのか質問したい。

鈴木委員

議会の中でも、本来は6月議会に補正予算を出すため、そこに間に合わせたいという思いがあったが、コロナの関係でどうしても遅れてしまい、ちょっと間に合わなかった。9月議会に間に合うようであれば予算の提案もしてもらいたい。

先日の日高村の取組を聞き、総務教育厚生常任委員全員が傍聴していた。毎回、検討委員会がある数日後に常任委員会で話をしている。それぞれの感想を聞いたりだとか。

9月議会に向けて日高村の取組を元にこういうものを提案したらどうかという話も出たが、それはやめようということになった。検討委員会に任せているのであり、ここでの意見を尊重し、それをもとにやっていくのがベストではないかと。議会が先に提案しても、それは逆に良くないのではないかという話になった。

ただ、前向きに議論している。ここで話し合ったことを議会が否決するようなことはないようにとも話している。私も議会の代表として来ているので、異論があれば私を通して言う形にしている。

井手委員長

それではグループディスカッションに入る。

次の第5回の時には傍聴の方も入っての会になる。そこで一定、検討委員会としての具体的な方向性を示し、第5回、第6回あたりで煮詰めて答申をしたいと考えている。それに向けた具体的な方向性の話し合いをこの場でしていただきたい。30分程度時間を取るので、その後また全体で共有、すり合わせをしたい。

今日、センターの場所までご提案もいただいた。それを叩き台にしてそこでいいのかという議論をしていただいても構わない。

鈴木委員

これとこれとこれを決めてもらいたいというものはあるか。

井手委員長

運営主体がどこなのか、各機関が連携していくにはどういう形がいいのか、それからセンターの役割。その3点くらいについて議論していただければと思う。

グループディスカッション共有

グループA

このグループでは誰がコーディネーターを担うべきかを主に話し合った。山首委員が作ってくれたイメージ図。概ねこういう枠組みになるだろうという意見だったが、どこがこの中心になるのか、誰がコーディネーターになるべきかという議論が主だった。

議論した中でも意見は割れていた。教育委員会だろうという意見、やはり学校でSSWや不登校専門の教員の方だろうという意見、また引き籠り等であれば保健師さんや社協ではないかという意見。あるいは、誰か1人優秀なコーディネーターを外から連れてきて配置しても、うまく機能しないだろうという意見もあった。

実際に、日々、不登校児童生徒と相対して関係づくりや支援をしているのは教員、SSW等であり、どうすればその方々がもっと外部の協力も得ながら支援をしていける環境を作れるのか。今は、学校であれば学校の中だけで何ができるか考えなければならないし、稲村委員（SSW）も保護者等から色んな話を聞くだろうが、その対応について外部の者に気軽に相談できる環境ではないと思う。それは、保健師、社協も同じ状況なので、相談し合える体制、チームを作っていかないと対応の幅は広がらないのではないか。

今日の前半の感想の時にも再三出た話だが、学校の不登校だけでなく、就学前から要因が表れる場合もあるし、学校を卒業してからも人生は続く。卒業後に引き籠りになるということもある。就学前から学校卒業後までと考えると、教育委員会が中心になって関係機関とともに新しい支援チームを作り、その組織が不登校等全員に関わり、その中では情報共有もしっかりできる形を作っていくことが大事ではないかということを話し合った。

グループB

まず運営主体について。先ほどのグループから教育委員会という話もあったが、ここでは副町長をトップに置くべきではないかと。町長をという意見もあったが、不在の時も多い。役場に居てすぐに動ける方がいいだろうということで、町長と教育長が副町長の脇を固める形でトップダウンをしていくのがいいという話になった。

各部署の連携について。どういったプレイヤーが出てくるのか、運営主体にも関わることだが、5月20日に日高村に来ていただいた時に、日高村では教育支援サポート教員として高橋さんがおられた。土佐町でも教育支援センターをやっていくなら、強い思いを持って、同様の人員配置を県にも要望していくべきではないか。運営主体の3役と、このサポート教員がキーパーソンになるだろう。

プレイヤーについては日高村さんの資料にあった方々と同様だと思うが、それをさらにカテゴリに分け、年齢ごとにサポートしていけるように、学校長、保育園長、教育サポート支援教員を入れていく。また、土佐町は地域が広いため、地域ごとのカテゴリとして子ども会、民生委員、地区長なども巻き込んでいく。その他、職種別として社協、SSW、SC、保健師、社会福祉士。それに加えて役場の地域担当職員が入って連携を持たせていく。

先ほどの話にもあったが、色んな組織等の壁をどうやって壊していくかというところは、上の運営主体がしっかりしていて、このカテゴリ別の方々がどう動くかがわかってくれば、どういう状況になっても指示通りに臨機応変に動けるのではないか。

センターの役割について。先ほど旧森小学校という意見もあったが、拠点は一つくらいあったとしても、この日は社協に手伝いに来てとか、とんからりんに手伝いに来てとか、出先の機関が開催場所になってもいいのではないかという話になった。ここが教育支援センターだから、ここに来てくれないと支援できないというものではダメだろうと。ときわ苑や、町内のあちこちが教育支援センターになればいいのではないか。例えば、とんからりんであれば高齢者にとっても、子どもにとっても、色んな経験やきっかけになるだろう。

具体的な場所の案としては、田井支所や、教育委員会にも近い旧町立図書館の1階なども片付ければ使えるのではないかという意見が出た。

グループC

昔と比べると、子どもに対しての関わり方も変わってきた。家でも挨拶をしないから、外へ出ても子どもは挨拶をしない。昔なら近所で悪いことをしていたら近所の人が怒ってくれていたが、今は学校へ電話がかかってくる。今、教育支援センターのあり方検討委員会ということで議論しているが、このグループでは、土佐町全体をフィールドとして、「教育」という言葉を外して「支援センター」という形で、山首委員が作ってくれた図のように、土佐町には色んな組織がすでにあるので、それらを上手く組み合わせていけば、たぶん日高村よりももっと良いものができるのではないか。それをどうやって作っていくかだが、縦割り行政をやめればすんなりできるのではないか。

コーディネーターは1人では限界があるだろう。2～3人置いて、その中で知恵を出し合ってやっていくのがいいのではないか。

井手委員長

それぞれのグループで話し合ったことを合わせれば、設定したテーマは網羅されているように思う。

次の会までにグループ討議も含めた議事録をまとめ、次の会では具体的に運営主体や方向性について議論いただくようにしたい。次はまた公開で行うので、傍聴もあると発言しづらいということもあるかもしれないが、ぜひ皆さんの心意気で活発に議論いただきたい。

次回で最終ではないが、今も支援が必要な方々はいるので、いつまでも続けるというわけにもいかない。そろそろ答申に向けて具体的な詰めに入っていきたい。

それでは、今日他に協議したいことはないか。

山首委員

例えばあと2回くらい会をする。次に方向性をまとめ、最終、町に答申をするとして、先ほど「教育」を外してという意見もあった。私たちが目指すこのセンターの理念のようなものは、教育委員会にお任せするのか。理念は、このセンターはこれを目指すのだという芯。そういう理念を検討委員会で出すとすれば、あと1回では難しいかなと思う。

井手委員長

最終的には理念を固めてということになろうかと思う。いずれにしても、次回は今日議論した部分を資料としてまとめてもらい、そこを細かく打ち合わせていきたい。

それでは、今日は以上で閉じさせていただいて構わないか。

以上で閉会する。